

最近の昆虫調査でわかり始めたこと(1)

調査期間や時期の制約もあって全ての範囲を網羅したわけではありませんが、ここ数年、機会あるごとに昆虫調査を行って来ました。地域は勿論、斜里周辺から知床岬の先端までです。この中で、気づいたことを数回に分けて書きたいと思います。その内容と言うのは「人為的あるいは自然的環境の改変に伴う自然循環システムの崩壊および生態系の変化」というちょっと理解し難いタイトルですが、昆虫が教えてくれた自然や生態系の変化と言うことです。

今回は「急変」というテーマで気づいたことを書きます。

今から20年以上も前にはじめて見た知床岬や羅臼岳、斜里岳の様子が当時と現在とではかなり違う景観になってきていることは、大きな驚きでした。

特に劇的だったのが知床岬で、背丈以上の植物が地面を覆っていたはずなのに、数百メートルあるいは数キロも見とおしがきく草原に変貌していたことです。いつ熊が出てくるかわからず、おっかなびっくり歩いていたのが嘘のようです。それを象徴するかのように、当時は注意深く探してもなかなか見つけることができなかった

「オオセンチコガネ・センチコガネ(フンコロガシの仲間)」などの虫が、今ではシカのフンに数十頭も群がっています。また、一方では崖際や斜面に普通に見られたガンコウランやエゾキリンソウなどの矮小植物が激減したのと同時にジョウザンシジミや笹を食草としていたセセリチョウ、セリ科植物に群がっていた数多くの虫たちがその可憐な姿を消しつつあります。この他にも激減した虫、逆に激増した虫がいるはずですが、残念ながら帯広畜産大学の調査(1960～61年)以前のデータや資料の所在がはっきりしていないことと、以後の情報は散発的なもののためはっきりしたことはわからないといった状況です。



1974年当時の知床岬(手前植物はセリ科草本やオオイタドリ)



現在の知床岬のようす

今回のテーマ「急変」に関してですが、昆虫の増減について密接な関係にあるものは広義の「自然循環システム」の変化、狭義でよく言う「食物ピラミッド」関係です。その関係が何処からともなく一方的に崩れ出し、修復できない状況に陥ると、その連鎖社会は崩壊します。そうすると、そこには偏った関係の社会が残るのではなく、運が良ければ新しく再生可能な競争関係社会が再構築されて行きます。運が悪ければ、崩壊したまま消滅してしまいます。難解な話ですが、要するに、食物ピラミッドの一番底辺を作っている植物や昆虫が一方的に崩壊(激減あるいは消滅)すると、そこには新しい植物や昆虫が作る社会が成立し、それを捕食する新しい動物が増え、環境全体を取り込んだ新しい自然循環システムが構築される・・・ということです。

これがまさに今、知床岬でおこっているのです。さて今後どうなるのか、10年後、20年後と継続した追跡調査が必要です。今後の変化について、注意深く見つめていく必要があるでしょう。(松田功)

年末年始休館のお知らせ

12月30日(月)～1月6日(月)は休館致します。新年は1月7日(火)から開館です。

あっという間の一年でした。もちろん一年の締めくくりは博物館恒例のもちつき大会。そして年明け第一弾として冬休み特別講座が待っています。お楽しみに!

(秋山)

発行 斜里町立知床博物館協力会 2002.12.15
099-4113
北海道斜里郡斜里町本町49 斜里町立知床博物館内
TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257
<http://www5.ocn.ne.jp/~museumsp/>